

戦後における書評新聞掲載書籍の分析

- 『図書新聞』創刊を中心に -

北原 彩美

日本において初めて成功した書評新聞は、1937年に創刊された『日本読書新聞』であるといわれる。『日本読書新聞』は、1935年あたりから始まった日刊紙の広告料値上げに対抗して、出版界独自の広告媒体となることを期待されて創刊された。1941年には日本出版文化協会の機関紙となり、第二次世界大戦下で一時休刊に追い込まれもしたが、終戦後、「言論統制という悪夢を追いはらった新しいブック・レビュー紙」を目指した田所太郎（1911 - 1975）をはじめとする編集者たちの尽力により、日本出版協会を発行母体として復刊した。「出版業界が結集した組織が発行母体となって出す書評紙」という基本性格を持っていた『日本読書新聞』だが、戦前からその編集に携わり、戦後には「編集兼印刷発行人」であった田所太郎は、業界内の対立の影響を受けない書評新聞を望み、『読書』を辞して1949年に『図書新聞』を創刊した。『図書新聞』の「創刊のことば」には、こうした田所の考える書評の理想がよくあらわれている。

これまでの書評論の性格をまとめた岡村敬二によれば、従来の書評論は、書評紙のスタイルについて論じたもの、日本における書評・書評家の地位が低いことを指摘したもの、外国の書評を見本として日本の書評について述べたもの、商業目的でない純然たる批評としての書評の必要を訴えるもの、書評・書評紙を社会 - 文化状況の反映として捉えたものの5つに分類できる。しかし、これらの先行研究では、著者自らの経験や主観に基づいて論が展開されているものがほとんどであり、書評新聞に掲載された実際の書評を用いて客観的に分析したものはない。そのため、本研究では書評新聞の歴史をまとめたほか、特に『図書新聞』の創刊者である田所太郎に注目して、『出版の先駆者：一業を興した異才たち』（1969）や『戦後出版の系譜』（1976）といった彼の著作から書評に対する考え方を探り、創刊時期の『図書新聞』で取り上げられている書籍についてその出版社やジャンルなどのデータを収集し、同時期の『日本読書新聞』と比較するなどして、戦後の書評新聞の姿を具体的に調査した。その結果、どちらの書評新聞でも、（1）児童書の扱いが一定数あること、（2）日本十進分類法による3類と9類の書籍が多く書評されていること、（3）逆に出版書籍全体の傾向と比べて5、6、8類の書籍はあまり取り上げられていないことなどが明らかになった。今回の調査において、両書評新聞に掲載された書籍を比較する限りでは、『図書新聞』の「創刊のことば」で掲げられた理想が実現されたということを示す有意な結果は得られなかった。このような結果は先行研究では明らかにされてこなかったことであり、本研究が書評新聞を客観的に分析した成果であると考えられる。

（指導教員 原 淳之）